

海・川・湖その世界とのふれあい

# マリンズノー

## MARINE SNOW

No. **11**  
1990. 3 .15



●  
目次

マンボウの飼育に ついて… 1	催し物…………… 5
2世イルカの 誕生について… 3	浅虫の海の生物たち(1)… 6
トピックス…………… 4	浅虫水族館日誌抄録… 6
	動物紳士録…………… 7

青森県営浅虫水族館



# マンボウの飼育について

神 正 人

マンボウ *Mola mola* は世界中の暖かい海に生息し、クラゲ等を主食にしていますが、詳しい生態や繁殖は謎に包まれた魚です。既に国内の数館で長期飼育が行われていますが、浅虫水族館でも夏休み期間中の特別展示としてマンボウの飼育を試みました。

マンボウは夏の訪れとともに青森県沿岸にもその姿を現すようになります。詳細な回遊経路については、恐らく未だ解明されていないのではないかと考えられますが、今回、我々がマンボウを捕獲するのにあたって事前に聞き取り調査した、太平洋側各地の沿岸定置網に入網する時期をまとめた結果は図1のとおりです。

これを見る限りでは、マンボウは冬に四国や紀伊半島の周辺の海域にいるようですが、その後、水温の上昇とともに北上しているようです。

宮城県本吉町沖に設置されている定置網のひとつである「三丁目網」の漁撈日誌によると、マンボウの入網は表層水温が12℃を超える6月頃から始まり、そのピークは14℃～17℃の時期になっています。そして18℃を超えると入網数はめっきり減ってしまいます。

この宮城県沖でピークを過ぎた7月中旬頃から、青森県の沖合いに姿を現し始め、そして8月に



図1 マンボウの捕獲時期（太平洋側）



水槽内を泳ぐマンボウ

は北海道の噴火湾沿岸で獲れるようになります。しかし、それ以上は北上することはないようで、秋に再び宮城県沖でわずかに入網することから、一部が沿岸沿いに南下していると思われる。

今回、マンボウの特別展示を夏休みに行ったのも、ちょうどこの時期に青森県の沖合で採集できるからなのです。そして、奇妙な体形のマンボウを見ていただくという他に、南の魚のイメージのあるマンボウが実は毎年、青森の海にも回遊して来ているんだという事を知ってもらいたかったからです。

マンボウは背鰭と尻鰭を使って泳ぎますが、小回りがうまくできません。したがって飼育水槽は大きな物ほど良いわけですが、我々がマンボウのために用意した水槽は、大きさが6m×2.4m×2m（水深）で、水量が28tのウミガメたちの入っている水槽でした。この水槽のウミガメたちは、毎年夏になると日光浴のために約2ヶ月の間、外のプールに移されるのです。

水槽の内側には、マンボウが壁にぶつかってケガをしないように、透

明なビニールシートを張りめぐらせます。マンボウを初めて水槽に入れると、やはり勝手がわからずに水槽の透明なガラス面に突進します。この時にシートがクッションの働きをします。

マンボウは成長すると、体長3m、体重も1tをこす大型の魚ですが、あまり大きいものはトラックでの輸送が無理なために、今回は体長が1m以内で、体重も30～40kgクラスの比較的小型の個体を選んで捕獲しました。しかし、当館で用意した水槽では、やはりちょっと窮屈だったようです。

それでも、餌は良く食べてくれます。捕獲や輸送に問題がなければ、搬入した翌日には、もう餌を食べます。マンボウは自然の海にいる時は、クラゲ等を主食にしていますが、水族館での餌は、刺身の甘エビを細かくミンチにして、だんご状に練り固めたものです。初めは、これを棒の先につけて、マンボウの口元まで持っていき、呼吸に合わせて吸い込ませてやります。こうして慣れてくると、やがては人のすぐそばまで寄って来て、我々の手から直接エビダンゴを取るようになります。

毎日の餌の量は、マンボウの体重の1%程度(約350g)で、これを午前と午後の2回に分けて与えます。そして、搬入した直後には、この餌に病気の予防のための薬を混ぜておきます。

しかし、こうして注意深く飼育を続けても、やはり、外傷や内臓疾患、そして、さまざまなストレス等により、残念ながら死亡する個体もありました。わずか1ヶ月半の特別展示でしたが、だいぶ苦労もしました。けれども、今回苦労した分だけ、いろいろな事をマンボウから学んだような気が



マンボウの捕獲 (写真提供 東奥日報社)

がします。そして、今度またマンボウを手がける時には、きっと、よりすばらしい飼育展示が出来るのではないかと考えています。

最後に多大なる協力とアドバイスをくださった松島水族館の皆様とマンボウの捕獲に協力していただいた青森県六ヶ所村海水漁協、泊漁協の組合員の方々に深くお礼を申し上げます。

# 2世イルカの誕生について

田村 徹

## 1. イルカ誕生

1989年7月30日午前6時、宿直者による朝の見回りの際、イルカトレーニングプールを遊泳中の仔イルカが確認されました。浅虫水族館初のイルカ誕生です。推定体長120cm、体重約30kg、まだ不安定ですが母親に付き添われて泳いでいる姿はなんとほほ笑ましいものです。出産当時トレーニングプールには母仔以外に3頭の雌イルカがいましたが、数日後これらに乳母役としての行動がみられるようになりました。母仔に寄り添って泳ぎ、母が仔から離れている場合は母がわりに仔を保護して一緒に泳ぐ。このような行動は自然界の鯨類においてもよく見られるようです。

出産から2ヶ月もすると仔イルカは泳ぎも上達し、遊びの行動も多くなります。母親の行動も注意して見てきましたが、食欲もあり良好です。日中我々が確認するだけでも日に6～10回の授乳が認められるようになり、母親への給餌が終わると仔イルカは下に潜り込んで一生懸命おっぱいを飲み、また元気いっぱい泳ぎはじめる。どうやら母仔ともに順調に成育しているようです。



母と乳母役に付き添われ泳ぐ仔イルカ

## 2. 母は強し!

そして初めての検査が行われたのは1989年11月15日、出産から3ヶ月半経ってからです。

ある程度予想はしていたのですが、母親の激しい妨害によりなかなか仔イルカに近づけません。われわれが仔に近づこうとすると、母親はもちろん乳母役のイルカまでが間に割って入り妨害する、時には噛みつこうとすることさえあるのです。普段人間に対しては友好的と言われているイルカで

すが“母は強し”です。約30分の悪戦苦闘の末やっと仔イルカを取り上げることができました。かわいい男の子でした。

その後、1990年1月24日に2回目の測定が行われ仔イルカの順調な成長が確認されています。約2ヶ月の間に、体長で6cm、体重で10kgも増えています。イルカの乳は脂肪・蛋白質などが多く、他の哺乳類に比べ非常に濃いといわれていますが、それにしても成長するものです。

仔イルカ成長の記録

測定月日	1989年11月15日	1990年1月24日
体長	164 cm	170 cm
体重	62 kg	72 kg
胴回り	95 cm	100 cm
尾鰭幅	38 cm	38 cm

## 3. イルカの繁殖について

バンドウイルカの飼育状況下での繁殖は難しいといわれています。

1990年2月に日本動物園水族館協会の海獣部会で報告された「飼育下における小型歯鯨類の繁殖について」という調査によれば、協会に加盟している30園館で開館から1989年8月31日までの間に出産された小型歯鯨類は332例です。そのうちバンドウイルカは232例、正産は132例で全体の56.9%となっています。また、正産個体の飼育日数を見ると8ヶ月以内に死亡したものが99例で75.0%を占め、5年以上生存した個体はわずか9例しかありません。

最近、国際的に「種の保存」が叫ばれるようになり、これまで各園館の内で行われてきた動物の繁殖に対する努力が、他機関との連携をとっていく方向に向かっています。そして、誕生から成長の過程を注意深く観察していくことによって、今まで知られていなかった動物たちの新たな生態が明らかになるかもしれません。

我々直接飼育に携わる人間にとって、やはり元気に泳ぎ回るイルカの姿を見られることが、何よりもうれしいことです。母仔共に健康に成長してくれることを願い、今後も見守っていききたいと思います。



## トピックス

### イワトビペンギンの保護

平成元年8月25日に、八戸市蕪島の海岸でペンギンを保護したと連絡を受けました。そもそもペンギンは、南半球だけに生息しているので何か違う鳥類ではないかと思いましたが、実際、搬入された鳥を見るとまさしくペンギンでした。種類はイワトビペンギンで、生息地はニュージーランド南部の島々やフォークランド諸島などです。

搬入された時、生後推定1～2年位、体長25cm 体重1.78kgの子供のペンギンで、用意しておいた餌のイカナゴを全部食べてしまいました。そしてピョン、ピョンと人の後を跳るように歩いたり周囲

を見たり、とても愛嬌をふるまいました。現在、1日に300～400gの魚を摂餌し順調に育っています。又当館には、イワトビペンギンが1羽しかおらず、とても寂しかったのですが、現在では寄り添うように立ち、とても微笑ましい姿です。



中央が保護されたイワトビペンギン  
育っています。又当館には、イワトビペンギンが1羽しかおらず、とても寂しかったのですが、現在では寄り添うように立ち、とても微笑ましい姿です。  
(成田秀春)

### 海ガメの体重あてクイズ

平成元年7月20日から8月20日までの夏休み期間中に、水族館の屋外プールに飼育展示を行っているアカウミガメ9頭、アオウミガメ6頭、計15頭のうち最も大きいものの体重を当ててもらおう「海ガメの体重あてクイズ」を実施しました。

屋外プール前に「水槽の中にいる一番大きなウミガメの体重は何キロかな?」という看板を立て、観覧者の方に体重を予想してもらい、応募用紙に記入していただきました。その結果、県内はもとより、北海道、東北各県、東京などの方から多数御参加いただき、応募総数2,989件、最低20kgから

最高360kgまでのかなり幅のある応募が寄せられました。実施期間の最終日に一番



大きなカメを取り上げて体重を測定した結果、ちょうど120kgでした。正解者多数につき抽選で8名の方に記念品を贈呈しました。

(金沢 勝)

### 第4回 図画展



館長賞

青森市浅虫小学校  
桜庭高太 3年  
「すごいマンボウだ」



館長賞

青森市小柳小学校  
ふくいたかこ 1年  
「イルカさんじょうずだね」

# 催し物

## 「水族館感謝デー」開催

平成元年10月7日から10日までの4日間、「水族館感謝デー」と称して多彩な催しを行いました。

これは水族館の地域社会における社会教育の場としての認識と生物に対する関心を高めることを目的として行われたものです。内容は、①生物教室 ②生物クイズオリエンテーリング ③アニメーション上映 ④イルカと記念写真！ ⑤水族館ガイドツアー と5つの催しが行われました。

生物教室では「イルカの生態と飼育」というテーマで、小・中学生を対象として行ったところ参加者が多数有り、特に7月末に生れた仔イルカの

見学がとても好評でした。また、イルカをショーステージに上げて観客と共に記念写真を撮ってプレゼントする「イルカと記念写真！」も好評で、希望者の長い行列ができました。その他内容が多彩で職員の対応がたいへんでしたが、今後も続けたい催しの一つです。(阿部恵一)



## 秋の水族館まつり

平成元年11月3日から5日までの3日間、親しみのある水族館としてのイメージアップと本県特産物のPR及び消費拡大を図る目的で秋の水族館まつりを開催しました。

館内では、昨年7月に生まれた赤ちゃんイルカの見学を軸に、アニメ映画の上映、恒例となった浅虫水族館図画展を催しましたが、特に赤ちゃんイルカは一般公開していないので、水族館まつりならではの企画として好評を得ました。屋外では、駐車場の一部スペースを利用して、抽選によるサケ及びホタテのプレゼント、関係諸団体の協力を

得て、水産物や農産物、地元特産品、花木、山草を市価より割安に来館者に提供することができました。



また、水族館職員がにわか板前に扮して、イカ焼、ホタテ貝焼を即売し、その味とともに好評の内に秋の水族館まつりは幕を閉じました。(木立)

## 冬の定期観光バス『魚たちと白鳥号』運行

昨年度から運行され、好評を博した冬の定期観光バス『魚たちと白鳥号』が今年度も12月17日の日曜日から延べ13回運行されました。

これは、雪のためどうしても観光客の出足が鈍くなる冬場の閑散期対策として、青森市交通部が音頭取りをして企画されたもので、浅虫水族館の他、平内町の浅所海岸に飛来している白鳥と戯れ、同町夜越山にあるサボテン公園も見学でき、しかも低料金という魅力も加わって、利用者から大変喜ばれた企画でした。浅虫水族館の設立にあたっての目的には、「通年観光の目玉」というキャッ

チフレーズもありましたので、我々管理する側にとっても当初の目的に沿った仕事ができるという意味で、とても有意義な企画でした。



これからも、こういった企画は機会がある都度関係諸機関と相互協力を計り、意義あるものにして行きたいと思います。(横山隆好)

## ～浅虫の海の生物たち～

### (11)ウマヅラハギ

*Thamnaconus modestus*

ウマヅラハギはフグ目、カワハギ科の魚で、北海道以南・東シナ海・南シナ海・南アフリカなどに分布しています。県内では、5月下旬から11月いっぱいまで磯や防波堤などで釣りをするとよく見られ、「チュッチュツ」と呼ばれ親しまれています。

体長は25cm位になり、平べったく細長い体型で顔は名前通り鼻面が長く馬面で、口元は愛嬌のあるおちょぼ口をしています。皮ふは硬くて小さな鱗でおおわれ、紙やすりのようにざらざらしています。背鰭は2基に分れており、頭部よりの背鰭は大きなとげになって、のこぎりのようにギザギザしています。ウマヅラハギが定置網に入ると、ざらざらした皮ふで他の魚が傷ついたり、網に背鰭のとげがひっかかると外すのにひと苦労するわけで、漁師さんたちにとってはあまり好まれていない魚のようです。釣人の間でもこの魚が多い場



所では、餌取りにうるさくて釣りにならないという話をよく聞きます。

味の方は同じ仲間のカワハギより劣ると言われていますが、なかなかどうして刺身や煮つけ、干物などにすると大変美味な魚のようです。

この魚は人なつこく、餌の時などは飼育員を見つけると水面まで上ってきて、愛嬌のある口でテッポウウオのように水をピュッピュッと吐き出します。そのしぐさは、「早く餌をくれ」と言わんばかりのカッコウで、なんともカワイイ魚です。

(太田守信)

### 浅虫水族館日誌抄録

- |      |   |       |  |
|------|---|-------|--|
| 6・15 | 愛知県岡崎市広幡小学校へザリガニ寄贈<br>尻屋よりアツモリウオ搬入            | 9・2   | マンボウ六ヶ所沖で放流  |
| 17   | 上野(葛西臨海水族園)へマダラ搬出<br>油壺マリンパークへマダラ、フサギンボ<br>搬出 | 4     | 茂浦で潜水採集リュウグウハゼ他  |
| 22   | 松島水族館へマダラ、イシナギ搬出                              | 9     | 野内川よりカジカ他採集  |
| 23   | 宮城県本吉町よりマンボウ搬入                                | 14    | 相模ふれあい科学館へカジカ、イバラトミヨ搬出                                       |
| 30   | 小樽水族館よりニシン他搬入                                 | 22    | 須磨水族園へホヤ搬出   |
| 7・1  | 小樽水族館へイシナギ搬出                                  | 10・2  | 八戸水産科学館へチダイ、ブリ他搬出  |
| 4    | 白糠よりスルメイカ搬入、展示開始                              | 16    | NHK 青森ティラピア取材  |
| 5    | 和歌山県立自然博物館よりウミシダ他搬入                           | 17    | テレビ朝日 スルメイカ取材  |
| 8    | 油壺マリンパークよりハリセンボン他搬入                           | 20    | 和歌山県立自然博物館よりトビハゼ搬入   |
| 11   | 六ヶ所よりマンボウ搬入<br>R A B、A T V、東奥日報同行取材           | 11・1  | 油壺マリンパークよりホシエイ他搬入<br>関東・東北ブロック園館長会議(寺泊水<br>族館)高橋副館長出席        |
| 20   | マンボウ展示開始                                      | 14    | アシカ放養プール舎、大型魚類予備水槽舎完成  |
| 21   | 油壺マリンパークよりシマイサキ他搬入                            | 11・23 | 大畑よりオオカミウオ搬入   |
| 23   | 開館6周年   | 28    | 東海大学海洋科学博物館よりサクラダイ搬入   |
| 30   | バンドウイルカ誕生                                     | 12・3  | T B S ヤリイカ取材   |
| 8・18 | ブラジル、サンタ・カタリーナ州副知事<br>一行来館                    | 8     | R A B ティラピア取材<br>関東・東北ブロック水族館技術者研究会(よ<br>みうりランド海水水族館)太田、金沢出席 |
| 20   | ウミガメ体重測定                                      | 23    | 男鹿水族館よりハタハタ搬入  |
| 31   | マンボウ展示終了                                      | 24    | 油壺マリンパークよりキュウセン他搬入   |
|      |   | 29    | R A B 年末の水族館生放送  |



動物紳士録



アツモリウオ

*Agonomalus proboscidalis*

地味な魚が多い北の海の魚の中では、ひときわ目立つ色・形をしています。この華いだ体色、そしていかにも“よろい・かぶと”を身につけたようなその姿は、平家の若武者「敦盛」を連想させ名前の由来となっています。

体長15cmほどになり、北日本、日本海、オホーツク海に分布します。産卵期は10～12月頃で、直径約2mmの鮮紅色の卵を産みます。

イトヨ

*Gasterosteus aculeatus aculeatus*

海へ下って生活する降海型と、一生を淡水域で過ごす陸封型とがあり、日本では北海道と本州の沿岸及び低水温の淡水域に生息しています。年魚で、降海型は10cm位、陸封型は7cm位に成長します。当館では十和田湖と十和田市の白上の湧水池しらうまに生息する陸封型のものを飼育していますが、約3年間飼育して、最大のものでは全長12.3cmに達したものがあります。



ミネフジツボ

*Balanus rostratus*

北海道から東京湾・朝鮮海峡にかけて及び瀬戸内海に分布し、海底の岩や生物に固着して生活します。暖流水域に生息するものは小型ですが、寒流水域では大型になり陸奥湾では殻径5cm・高さ9cmに達するものが珍しくありません。

浅虫周辺では「カキ」等と呼び、ホタテ漁で混獲したものを賞味します。味は大変に良くエビ・カニ類との類縁関係を実感できます。



表紙説明 バンドウイルカ2世

昨年7月30日に誕生したバンドウイルカの赤ちゃん。生まれた頃は泳ぎもまだままならぬ様子でしたが、今ではプールの中を所狭しと泳ぎ回ったり、ジャンプしたりと大変に元気いっぱい、やんちゃぶりをいかんなく発揮しています。詳しくは本文3ページを参照下さい。

マリンスノー No.11

1990年3月発行

編集兼発行人

(財)青森県企業公社

青森県営浅虫水族館

〒039-34 青森市浅虫字馬場山1の25  
TEL 0177-52-3377